第11回研究集会
（日本近代文学会北海道支部共催）

二〇一〇年八月二八日（土）
北海道大学
人文・社会科学総合教育研究棟
W四〇九教室

開会の辞　旭川大学　片山礼子

【研究発表】
「不行儀」の行方
―横光テクストにおける恋愛とモダニズム
芳賀祥子（お茶の水女子大学大学院）

〈音〉をめぐる係争
―横光利一の「罌粟の中」を中心に―
韓然善（北海道大学大学院）

『旅愁』における〈非合理〉の他者
舘下徹志（釧路工業高等専門学校）

【講演】
横光利一の故郷意識
―「梶」と「矢代」をめぐって―
神谷忠孝

閉会の辞　横光利一文学会代表　茂木雅夫

第十一回研究集会印象記

野坂昭雄

今回の研究集会は日本近代文学会北海道支部との共催であった。私は現在九州に暮らしていて、最も遠方からの参加者ということになるが、学生時代には東北支部に所属していたので、幾度か合同研究集会にも参加したことがある。今回は、どことなく懐かしい場所に帰るような気がしていた。また、集会のテーマは「モダニズムのボーダー」という幅広いもので、さまざまな切り取り方があり得る。事前に予稿集が送られ、発表内容が大凡わかるだけに、どのような質疑応答が繰り広げられるかが非常に楽しみであった。

最初の研究発表は、芳賀祥子氏の『不行儀』の行方――横光テクストにおける恋愛とモダニズム」で、モダニズムにセクシュアリティの面からアプローチした論考であった。芳賀氏は、これまで論じられることの少なかった「兄妹行進曲」を取り上げて、この戯曲風の作品が配偶者以外を愛するという「不行儀」を志向しながらも、日常的な夫婦生活の中に差異・変化を見出すことを通して、男女関係の新たなあり方を模索した作品として評価する。筆者は大正・昭和期の恋愛に明るくはないのだが、芳賀氏の観点は大変興味深いものに映った。聴衆の質疑から、今後の課題とする点も見つかったが、今回の特集では「どのようにボーダーを引けるか」という可能性を見出す点に一つの意義があるので、その点からすれば、ボーダーの引き方（の可能性）が複雑多岐にわたることを、芳賀氏の発表は充分に伝えていたように思う。

次の韓然善氏の「〈音〉をめぐる係争――横光利一の「罌粟の中」を中心に」は、「罌粟の中」で描かれる音や声、また言葉の分析を通して、文化間のコミュニケーションや恋愛の諸相を提示する作品として捉えた考察であった。梶はハンガリーの文化に触れながら、それを異質な他者ではなく、日本人の自分に分節可能な形で捉えようとしている。しかし、〈音〉をめぐるズレは、ボーダーの曖昧さを浮かび上がらせる。韓氏は、日本とハンガリーとの関係も踏まえながら、言語やメロディなどさまざまな〈音〉が交錯する状況を描いた横光の「罌粟の中」を、「様々な〈音〉を聴取しようとした試み」として評価した。こうしたアプローチは、他の作品を考える上でも重要かつ有効なものだと筆者には思われた。

舘下徹志氏の「『旅愁』における〈非合理〉の他者」は、まさに『旅愁』という作品を同時代の哲学や宗教などの言説の中に置き、『旅愁』の発想の射程を考察しようとする試みであった。特に『旅愁』に数多く見られる非合理な言説を、「〈生体／有機体〉の特異性や唯一性を説く生気論的な考え方」に依拠するものと捉え、合理＝理性という〈他者〉を仮構して絶え間なくボーダーを引くことによって自己を中心化していく仕組み、運動を顕在化させている。非常にボリュームがあり、さまざまな言説に広く目配りした発表であった。非常に教えられる点も多かったが、一方で『旅愁』のいかがわしさをどう評価するか、という問題の難しさもあらためて認識できたように思う。

最後に、横光を中心とした昭和初期の文学状況について、これまで長年研究されてきた神谷忠孝氏による「横光利一の故郷意識」と題する講演があった。「故郷意識」というと、以前からさまざまな形で語られてきた、いわば手垢にまみれたテーマのようにも見える。しかし、神谷氏は、もともと農村を舞台にした作品を書いた横光が、都市を描いた「機械」のような作品を経て、ふたたび故郷への意識を提示してゆく横光のテクストを辿りながら、具体的な生活のある地としての故郷（への意識）を横光作品における重要なポイントと位置づけ、またその意識の内実を分析する。横光の故郷意識もまた、近代という時代が生み出した、ボーダーを引く運動の一つなのに違いない。

以上、研究発表が三本と神谷忠孝氏の講演、そのいずれもが重要な問題提起をしており、内容の濃い集会だったと思う。モダニズムとは、概念規定するのが空虚なぐらい、運動性を持った概念である。横光は果たしてどのようにモダニズムに対峙したのか、まだまだ考察の余地は広く残されている。今回の集会で提起された問題は、横光の可能性のほんの一部にしか過ぎないだろうが、多くの示唆を受けることのできた機会であった。

第十一回研究集会印象記

山﨑義光

今年は北海道も猛暑。とはいっても、大阪から出かけていくと、なんとも快適な暑さで、大学校内には近隣の人たちなのか、旅行者なのか、たくさんの人が流れ歩き、芝生の木陰に憩っている人々の風景がおだやかに見えながら、しかし、なんか変だぞと思ったのは、無軌道な若さのような大学の活気そのものがどこにも見当たらないようにしまいこまれ、よそ行きな感じが否めないところだとも感じつつ、そんな北海道大学の一室で、今回の研究集会は開催された。

今回も、「予稿集」があらかじめ送られていたので、発表時間はコンパクトに、質疑の時間はたっぷりととられた。慣れないせいもあって、やはり質疑が長すぎるという感じもし、そんな声もあった。発表者へのプレッシャーも大きいだろうが、しかし、よくある学会・研究会のパターンではなく、本会のように対象が限定された会だからこそできるやり方――題材や論点を共有した議論、微に入った意見交換、情報交換ができる場とする――という点では、今後も継続していいようにも思った。

さて。今回の特集では、二〇世紀初頭の「モダニズム」が、前時代にはなく、新たにもたらしたさまざまな境界（ボーダー）がどのように措定されるのかということ、とともに、それによって不可視化されることをめぐって生じる、ずれ・ゆらぎ、錯綜、越境といった

問題をテーマとした。発表は、それぞれにこのテーマにかかわる繊細で鋭い内容だった。

芳賀祥子氏は、「恋愛」――性欲・恋愛・結婚――をめぐる一九二〇年代の言説のなかに、横光の小説「兄妹行進曲」をおくことで、この小説テクストが、「恋愛」のヘテロセクシズムというモダニズムのボーダーに対し、「兄妹」の会話を介して提示することで、ゆらぎを描き出していることを指摘した。

韓然善氏は、ハンガリー・ブダペストに旅する主人公が、唱歌「ダニューブの漣」を想起することで、車輪の音、見たこともない風景を「愁ひ」をおびたイメージとして自己化しつつ、その一方で、ジプシーの演奏する「ダニューブの漣」の場面では自己化された「愁ひ」のメロディとのずれがはらまれると論じた。ダンスホールで会ったアンナの〈囁き〉あるいは、「しらゆきはどうしてゐますか」というヨハンの小声などの〈声〉もまた、自他の境界＝ずれを顕在化させていると指摘した。

舘下徹志氏は、機械論的世界観に対して、それをも包括する生気論的で全体論的な思考が『旅愁』のなかに描かれることを、同時代の歴史哲学、科学哲学、宗教学の諸言説を参照しながら指摘した。

神谷忠孝氏の講演は、横光の故郷意識を、横光ゆかりの地を描き、あるいは、主人公「梶」を登場させた小説群を対象にさぐるものだった。

動力の発明、船・汽車・飛行機の発達、それによる人や文物の交流は、まずもって都市に滞留し混淆する。もちろん、交流は、対等な立場で行われるわけではなく、軍事・経済・政治・技術を含む国力を背景に、資源の獲得、生産・需要の拡大、支配と強制と連動しており、物の製造・交易・流通を通じた異文化の混淆の地平で、強者による弱者の支配、利益追求による闘争を生じさせながら行われる。そうしたなかで、それぞれの地域性は、異質なもの、他者の浸透によって新たなものへ変成していく。エロ・グロ・ナンセンスとは、そのような事態の表層的な現象を指して言った言葉であるし、ジャズやカクテルの流行も、そうした時代の動きを象徴する。このとき破壊され、変成したものに、どのような意味や価値を認めるかをめぐって、その事態のただなかで右往左往、沈思黙考、おしゃべりする人の生態が、この時期に書かれた小説のなかに書き込まれている。ジェンダーをめぐる身体化され内面化された制度、社会関係のなかに埋め込まれての現実認識、感性への立脚と知的超出としての思想・哲学、故郷への感傷と国民国家という制度。そして、そうした場のなかで追求されるアイデンティティ。偶有的で、荒唐無稽（ナンセンス）な場に投げ出されつつ、抜きがたく身体化された社会性（ハビトゥス）に貫かれてあり、アイデンティティを希求しながら、理念、制度、危機を前にした集団的熱狂の組織化にまきこまれてある。今回の発表はいずれも、そうした場のなかで、幾重ものボーダーの波間にゆらいだ、主体たりえない主体の表象として横光的小説の形象を読むことの可能性が示されていたように思った。

文学散歩印象記

小林洋介

北海道大学での研究集会の翌日、八月二十九日。文学散歩は、前日の講演者でもある神谷忠孝氏が企画してくださった。集合場所は中島公園内にある北海道文学館。幸か不幸か北海道マラソンの日と重なり、しかも文

アナウンス

第10回大会

二〇一一年三月二六日（土）

二松學舍大学　九段キャンパス　一号館八階八〇七教室

午前一〇時より

【開会の辞】　二松學舍大学　山口直孝

【第1部　研究発表】　司会：野中　潤・古矢篤史

横光利一「感想集」「夜の靴ノート」「夜の靴」における比較考察
——度重なる断層——　青山学院大学大学院　佐藤良一

横光利一「持病と弾丸（「或る長篇」の第四篇）」
——推敲・改稿過程をめぐる考察——　立教大学大学院　浦田　剛

評議員会

総会

午後一時三〇分より

【第2部　横光利一研究の現在と課題】　司会：松村　良・山本亮介

伝記研究の領域　掛野剛史

メディア研究の領域　島村健司

ジェンダー研究の領域　石田仁志

モダニズム研究の領域　田口律男

ポストコロニアル・ナショナリズム研究の領域　黒田大河

レトリック・表現研究の領域　杣谷英紀

《討議》

【閉会の辞】　横光利一文学会新代表

懇親会（一三階ファカルティ・ラウンジ）

第12回研究集会（川端康成学会との共催）

日時：二〇一一年八月二七日（土）予定

会場：二松學舍大学（予定）

テーマ：「アヴァンギャルド×新感覚派」（仮）

横光利一文学会会報　第18号
二〇一一年二月二八日　発行
◆横光利一文学会事務局
〒112-8606　東京都文京区白山五-二八-二〇
東洋大学文学部日本文学文化学科　石田仁志研究室内
☎　03-3945-4255
公式URL　http://yokomitsu.jpn.org/
◆編集人　松村良　石井佑佳　石田仁志